

## 皮心伝心

### 変わりゆく患者事情

平成とともに開業し、30年が矢のように過ぎてしまいました。この間、大きく変わったことといえば、従業員2人(受付、看護婦)が4人、手書きレセプトがコンピュータ化したことです。生まれ育ったこの日本橋界隈は、花街、料亭、銭湯、寄席、映画館、問屋街、証券街、穀物取引所などが混在した粋な町でした。昭和39年の東京オリンピック、昭和47年のオイルショックで町の雰囲気が一変し、人の流れも大きく変わりました。

開院当初の10年の患者たちは、「先生を頼って来ているから早く治して欲しい。俺たちには先生方のむずかしい説明など聞いてもよくわからない」という説明無用派でした。専門は専門家に任せるタイプでした。また、ネクタイ姿のサラリーマンは、口に出さずとも医師を尊敬する姿勢がみえました。

その後10年、バブルが崩壊し、銀行などがあった表通りの様相が一変しました。商店主もバブルの影響を受け、この町に住めなくなりました。一方、歯抜け状態の空き地に、いままでこの地になかったチェーン店や会社がみられるようになってきました。この町で大企業の1つである山一證券がなくなったことには、一企業がなくなることで終わらず、その生活を支えていた傘下企業の生活まで支配する恐ろしさを肌で感じました。人口減少傾向が出てきた中央区は住民を増やす政策を推し進め、乳幼児をもつニューファミリーや外国人など富裕層が増えてきました。受診者傾向がまったく異なってきました。以前のような町のいなせな人はめっきり影を潜め、ネクタイ姿も少なくなりました。

この10年、インターネット患者がますます増える傾向にあります。自分の症状をネットで検索し、自分の思考回路で病名を考えてくるタイプ。外国人で、日本語を少ししかしゃべらないが、自分が納得いくまで席を離れないタイプ。欲しい薬をねだるタイプ。子供や親の治療に、自分のご都合を強く主張するモンスタータイプなどいろいろで、本当にむずかしい時代です。

皮膚科医療にも、町や人の流れ同様凄まじい速さで、効果ある数多くの治療薬が出てきました。また、2000年ごろより疾患ごとの治療ガイドラインが作られてきました。このガイドラインを患者説明時に頭の片隅におきながら診療にあたらねばならない時代です。

50年前の『白い巨塔』がいまだに再放送され、根強い人気があります。そこに、視聴者である患者は医師に対して何を求めているのでしょうか。正義？ 治療効果？ 尊敬？ 医師像？ 病気の共有？ 病気へ寄り添う？ 傲慢さ？ かっこよさ？

ときは移りすぎ、町が変貌しても、私の日常診療に変わりはありません。日々の診療に疲れ、患者数に一喜一憂し、月末の煩わしいレセプトチェック。こんな生活を30年。入院するような病気もせず、今日まで続けられたのは、ひとえに長年勤めてくれていたスタッフのお陰です。モンスター対応ができるうちは、「まだ生ける」と自ら思わせながら、衰えてくる肉体に「喝」を入れ、毎日の診療にあたっています。

早川 道郎

(皮フ科早川クリニック)